

資料涉猟余話

その131

前回述べたような経緯で天龍峽が世に知られるようになる

難。維新後、明治政府に出仕して太政官大書記官となり、三

と、次第に文人墨客も当地を訪れるようになった。そうした中、一人に、近代を代表する書家、日下部鳴鶴がいた。

天龍峽記と天龍峽十勝
日下部鳴鶴と天龍峽十勝

鎌倉貞男



日下部鳴鶴

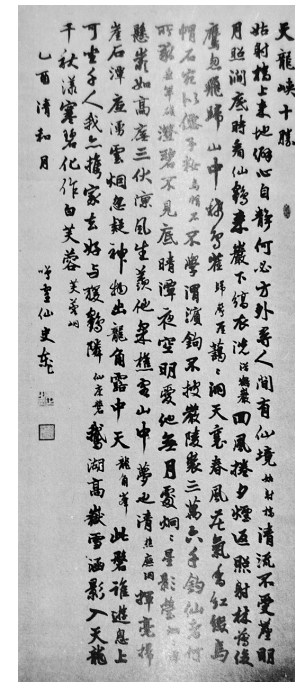
日下部鳴鶴(一八三八〜一九二二)は、彦根の人。名は東作、彦根藩士田中氏の二男に生まれたが、長じて日下部家を嗣ぐ。養父は「桜田門外の変」で殉

年十月である。彼を天龍峽に誘ったのは、鳴鶴門下で、官吏として飯田に赴任していた、当時の飯田裁判所長の米沢坎居と、その書記官だった工藤東圃であ

この秀麗な自然美を漢詩文で深められた名勝地にしようとして「天龍峽十勝」を選定した。その結果、例えば「太田橋」は「姑射橋」に、「つるしね」は「浴鶴巖」に、「花立岩」は「龍角峰」に、「千畳敷」は「仙牀盤」に、それぞれ名を変えた。さらに鳴

鶴はそれらを「磨崖の碑」にしようと考え、岩壁に刻すべき十勝名を揮毫した。しかし、それらを切り立った岩壁に岩彫りすることは、決して容易なことではなかった。低い場所

鳴鶴が揮毫した十勝の詩



は、かつての「太田橋」も乗って彫った場所もあるという。この難事業をやり遂げた石工は中平丑松・木下徳安・沖田亀一等である。この事業には多額の費用を要した。そ

のために松泉は、地元の有力者である安藤弥十郎・今村栄太郎・関島鎌太郎・牧内新三郎・塩沢太一郎等に助力を依頼した。また、先述の米沢は飯田の素封家、上柳喜右衛門・木下与八郎等に依頼して資金援助を仰いだ。そうした人々の努力が実り、明治十六年十二月に天龍峽十磨崖の写真と石刷

(故人敬称略)